

文系短大生の学期末レポートの論文らしさ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中尾, 桂子 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5665

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



文系短大生の学期末レポートの論文らしさ

文系短大生の学期末レポートの論文らしさ

中 尾 桂 子

概要：アカデミック・ライティングを念頭においた短大国文科必修科目「日本語の文章表現」履修者は、1年間の学習の結果、どの程度、目標である文系学術論文に近づいたのか。学生の期末レポートと文系学術論文の中の論述関連語句を比較した結果、形式面においても、表現面においても、不十分ながら、論文らしい特徴が観察されたが、その一方で、論文とは異なる表現も多く見られた。それら学生の期末レポートに多く見られる表現の特徴から、「アカデミック・ライティングの指導」では、具体的に、目標とする分野を特定し、その分野に特化した論理展開の表現方法を学ぶことが効率的で、多角的な対応を目指す一般的なアカデミック・ライティングの教材を利用する際は、指導上の目標設定を別途設けて、そのための指導を補填する必要があると考えられた。また、文学系分野を目標とする場合に、具体的に指導するとよい表現のいくつかを検討した。

1. はじめに

大学のレポートや卒業論文の質的向上を目指し、欧米の論文指導を想定したアカデミック・ライティングの指導が、昨今での大学の初年次教育では、必須の科目として扱われるようになってきている。大妻女子大学短期大学部でも半期の教養科目として文章や口頭での表現を指導する科目が設定されているが、国文科は、創作・論文作成が必須科目であることから、半期2期の履修が想定された1年次の専門必修科目として「文章表現」が設定されている。

国文科の「文章表現」科目が目指すのは、社会人になるための基本的な文章表現力を養成すること、ならびに、卒業論文や、レポート作成である。このことから、前期、後期の2期を、おおよそ、生活のためと論文のためと2つに分

けてシラバスをデザインしている。前期の授業では、メモ、メール、手紙、語彙力の強化や、身近な出来事についての文を書くこと、物事や自身を掘り下げて考えて、文章を書くこと、それをエントリーシートにつなげることなど、日常生活や就職活動を念頭に置いた表現力の指導を行う。後期の授業では、論拠の立て方、意見と事実の合わせ方、引用方法といったレポートや論文の決まりを学びながら、推敲が行えるように指導する。前期科目、後期科目のシラバスの中に大学生活で必要とされる文章能力が含まれることから、短大国文科の「文章表現」科目も、アカデミック・ライティングの指導だと位置づけられる。

従来の国文科の「文章表現」科目では、大なり小なりアカデミック・ライティング関連の項目指導を盛り込みながらも、文学的レトリックの指導や個人の内面を掘り下げて文章にするとといった指導も行われ、その指導方法や時間配分はこの担当者に委ねられてきた。

2009年に、短大国文科の教員が希望する「文章表現」科目の指導内容が、当時の指導項目と一致しているか調べたところ、卒論指導のための基礎力向上を元得る声が多いことから、国文科の複数の教員が必要だと考える指導内容を「文章表現」科目の指導項目の中核とすることを提案して（中尾他、2010）、「文章表現」科目の指導者間で必須指導項目の統一的な調整を行った。

しかし、卒業論文の指導の担当者から、依然として、推敲や論拠、表現や論文としての体裁上の決まり事が守れない学生が多いという声が聞かれる。1年間の指導では十分な知識と表現力がついたと言えず、学生の論文を書くための文章表現能力が不十分だと考える教員がいるということは、さらに、指導内容や指導方法の見直しが必要な点があるということである。

指導が納得のいく結果につながらないと言われる原因として、いくつかの原因が考えられるが、学生に、指導内容の意味が伝わっていないことや、指導目標と指導内容が一致していないことなどが考えられる。

現在の国文科の「文章表現」科目での指導項目を見ると、市販教材を参考にしたものが多く、指導方法についても、一般的なアカデミック・ライティングの指導に準拠したものとなっている。したがって、論文、レポートを目的とするアカデミック・ライティングの指導の内容は、大きく3つになっている。す

なわち、(1) 書式、表記、構成、内容に関する諸注意、(2) 段落内の表記、段落単位の記述練習、(3) 短い意見文、小論文の練習、であるが、これらの練習では、A4サイズ1枚程度の文章を記述させ、それを提出させて＜添削して返却＞を繰り返すというものである。

アカデミック・ライティングを目的とする指導としては問題はなさそうであるとはいえ、その指導内容は、当為として必要だと推測されたものであり、日本文学、日本語学、日本文化、日本の図書出版といった卒業論文の4種のゼミ分野の表現や体裁上の規則に、どの程度沿うものかについては、未だ、十分な検証が行われていない。また、記述と添削という指導方法だけで良いのかについては不明な点も多い。コースデザインの際の設定目標と、教材の妥当性を再考するためには、国文科の現状と合っているかどうかを確認する必要があるだろう。

そこで、本稿では、国文科の卒論ゼミのうち、文学と語学を大きく国文学系として捉え、国文学系論文を目標とした場合の、1年間の指導後の学生の到達具合を調べることにする。今回それは、村田(2007)が文系論文の指標と指摘する表現を用いて、学術論文と学生の期末レポートを比較し、その一致具合を見るという方法により、学生の「到達度」を判断するというものである。これにより、国文学系学生の目標となるはずのである国文学系論文、ならびに、学生の期末レポートの表現の実態、それぞれで利用される指標の特徴と、両者の一致具合や差が確認できる。また、ある程度、指導項目として不足している具体的な表現や指導の方向性について検討することが可能だと考えられる。

2. 調査の方法

アカデミック・ライティングの「アカデミック」とは大学等の「学術活動で必要な」という意味で、「ライティング」とは文字言語による表現だと考えることにする。この場合の「アカデミック」な「表現」を、本稿では、学術論文の「論述」スタイルを支える表現と位置づける。「論述」とは、論を展開することや、論を立て、説明していく文脈上の流れを言い、「スタイル」は、この

論述を形成するための表現によって成ると考える。そして、「論文」は、この論述スタイルを持つものだと考える

では、具体的に、どのような表現の使用で「論文らしさ」が決まるのか。

文章の文脈を形成する表現としては、語句の関連性の他に、論述時の結束性に影響する語句であるいわゆる「機能語」が挙げられる。具体的には、指示語、接続詞、主題、文末の助動詞相当語句などであり、これらの機能語が中心となって、論理展開を形成する（メイナード, 2004）。

村田（2007）は、論理展開を支える機能語句である接続語句、助詞相当句を指標に、工学、理学、経済学、法律学、医学、文学等の学術論文と、新聞記事、小説等の文学作品を比較することで、学術論文に特徴的に使用される機能的な接続語句を特定し、さらに、学術分野別にそれらの使用傾向の特徴を明らかにしている。

そこで、形式的に明確な観点を観察観点とするために、村田（2007）が「文系論文」に特徴的な使用が見られると指摘した接続表現、ならびに、メイナード（2004）の指摘する機能語のうち、語として形式的に明確な判断がしやすいものを指標にする。いわゆる接続詞、指示語（こそあど）、文末形式で、これらメイナードの3つの観点と、村田（2007）の接続語句を指標に、国文系学術論文と国文系の1年次生の期末レポートを比較する。

今回のリサーチクエスチョン（RQ）は、以下の3点である。

- i. 文系学部学生のレポートの表現は論文らしいものであるのか
- ii. 文系学部学生に対するアカデミック・ライティングの指導充実に必要な事柄はどのようなものか
- iii. 文系の論文らしさを向上させるのに影響がありそうな語句にはどのようなものがあるか

2.1. 調査対象

4

本稿で国文系学術論文（以下、学術論文）としたものは、国立情報学研究所の論文情報検索データベース・サービス CiNii でオープンアクセスできる国語学系論文と国文学系論文である。国語学系論文は、言語学、日本語学、国語学

といった下位分類は問わず、現代日本語文法を題材とするものとした。また、国文学系論文は、近現代以降の文学を題材とした論文で、国語学系、国文学系、それぞれ、49本ずつ、計98本を「学術論文」（以下、論文）として利用する。これらの総語数は約81万語となる。

また、本稿で利用させてもらった国文系学生の期末レポート（以下、短大生レポート）は、国文科の「文章表現」をH22年度とH23年度に履修した短大國文科の学生の期末レポート47人分で、総語数が約53,634語である。

なお、2種のテキストの比較ではその差がわかりにくい。同様の条件でのレポートで、かつ、ある程度の差が見込まれる文系学部1年次の留学生の期末レポート（2006-8年分）30人分を比較参照用に利用する。留学生の期末レポートも、アカデミック・ライティングの科目の最終課題である。表1に、比較に用いるテキストの概要を示す。

表1：調査対象論文・レポート概要

テキスト区分	論文数(本)	データサイズ(KB)	総語数	異なり語数	文数
国文学系学術論文	103	2,636	821,287	31,096	23,169
短大生のレポート	47	173	53,634	6,281	2,147
(留学生のレポート)	30	122	38,710	3,820	1,749

2.2. 調査の手順

学術論文と学生レポートは語彙ベースで比較する。そのために、まず、それぞれのテキスト毎の語彙リストを作成する。語彙リストの作成にはマイニングソフトKH Coderを利用し、単語単位の認定と単語の品詞情報は全てKH Coder搭載のChasenに準拠する。

各テキストの指標毎に頻度順の語彙リストを作成するが、共通するものとそうでないものを選別し、共通して利用されているものを比較する。ただし、論文の総語数と学生レポートの総語数の差が大きいことから、比較用の語彙リストは100万語あたりの調整頻度（PMW）で表す。

各テキストの語彙リストに共通して見られる語彙を共通使用語彙として、これらの使用数の差を仮説検定（以下 χ^2 検定）により確認する。また、両者の相互関係を見るために、これらの関係が視覚化されるコレスポンデンス分析を

行う。検定には、石川・前田・山崎（2010）付属の「仮説検定用 Excel ファイル」を用い、コレスポネンス分析には、社会システム分析プログラム「College Analysis Ver. 5.0」を用いる。

2.3. 調査の指標

調査指標は、学術論文と学生レポートの文章中の指示語（表 2）、接続詞（表 3）と、両者に共通して高頻度に用いられる文末形式（表 4）、ならびに、村田（2007）の文系学術論文に特徴的に使用されている接続語句（表 5）である。

これらの指標は、論文、レポートのどちらかに高頻度で利用されているものを対象としている。例えば、文末形式では、いわゆる動詞述語文の形式が全て対象として扱われないが、これは、論文、レポート、両方で、そもそも利用数が少ないものが対象外となっているためである。

また、指示語は「こそあど」系の語のみを対象とするが、KHCoder が利用している形態素解析システム Chasen では「連体詞」と「名詞 - 代名詞 - 一般」にまたがるものとなる。本稿でも Chasen の出力のこの 2 品詞を「指示語」とする。しかし、指示に利用されるものであっても、「ある」や「あの」などのいわゆる連体詞や代名詞となるものは対象外とし、同じく、連体詞「同じ」や疑問代名詞「どなた」「だれ」等も対象外とする。なお、接続詞の表記の違いは、意図があるものと見なし、漢字表記とひらがな表記の語句を統合しない。さらに、論文に特徴的な接続表現（村田，2007）には、節を接続させる機能をもつ複合助辞等接続詞、副詞、名詞相当語句も含まれる。具体的には、それぞれ、次の表 2～5 の通りである。

表 2：指示語

あの	これ	そこ	どういう
ある	これら	その	どこ
こういう	こんな	その他	どちら
どこ	そういう	それ	どの
こちら	そういった	それら	どれ
この	そうした	そんな	どんな

表 3：接続詞

そして	次に	なお	で	だが
また	一方	ただ	逆に	実は
しかし	つまり	次いで	ついで	さて
例えば	しかも	でも	すなわち	にもかかわらず
そこで	ところが	それでも	ただし	ゆえに
または	あるいは	それとも	したがって	又は

表 4：文末形式

ある。	た。	である。	れる。
いる。	だ。	できる。	言える。
う。	たい。	ない。	考える。
か。	だろう。	なる。	思う。
する。	った。	られる。	

表 5：経済学, 工学, 物理学, 文学論文で特徴的に使用されている接続表現 (村田 2007)

「論文」度が高くなると考えられる語句	～において / における N
	すなわち
	～によって / による (理由)
	ので (理由)
	～によって / による (方法)
	～によって / により / による N (理由)
	ただし
	～ながら [も] (逆接) 文特
	～ため [に] (目的)
	～について / についての N
論理性が高くなると考えられる語句	むしろ
	～とともに (同時) 文特
	～とは <定義> 文・経特
	すなわち
	つまり
	たとえば
	～のに対して <対比>
	他方
	一方 [で] 文学特
	～によって / による N <理由>
特に文学論文に顕著なもの	～ため [に] <理由>
	ので <理由>
	したがって <帰結> 文以外特
	～ [た] 結果 / Nの結果 文以外特
	～うえ [で] 条件
	まま 付帯状況
	つつ 同時
	とともに 同時
	～ものの
	～にもかかわらず
つつ 逆接	

	～ながら 逆接
	～について / についてのN
	～によって / によるN根拠
	～にもとづいて
	～よれば 根拠
	たとえば
	むしろ
	～とすれば, とすると, としたら, としても
	～とは<定義>
	一方 [で] 文特
	～ながら [も] (逆接)
	～とともに (同時)

3. 学生の用いる論述関連語句

3.1. 指示語

3種のテキストに共通して利用されている語の使用頻度を100万語あたりの調整頻度に変えて表6に示す。使用頻度の多い「これ」「この」「その」「それ」は、学術論文にも、学生レポートにも高頻度にて使用されている。確かに、「その」「それ」の使用数は学術論文に有意に多いが、学生も割に使用していることから、これら4つの指示語は、記述者に関係なく、日本語の記述の際には、通常、使用されるような類いのものであると考え、ここでは「基本的な指示語」としておく。

一方で、いずれかのテキストにのみ特徴的な使用傾向が見られるものもあった。「基本的な指示語」も使用してはいるが、学術論文にのみ、顕著に見られるもの、短大生レポートにのみ、顕著に見られるもの、留学生レポートにのみ、顕著に見られるものがある。

「論文」: 「それら」「それ」「その」「そうした」「これら」「ここ」

「短大生」: 「そういう」「そんな」「どの」「そういった」

「留学生」: 「こういう」「どんな」「どこ」「こちら」「どちら」「その他」

「こんな」「どういう」「どれ」

また、学生の指示語が論文に比べて有意に差があるものを表7にまとめた。

表6：指示語(コソアドのつく語)の使用頻度 [PMW]

指示語 PWM	論文	短大生	留学生
この	3,719	3,319	3,642
その	3,624	2,610	2,480
それ	2,172	1,603	982
これ	1,426	1,324	1,059
ここ	966	298	362
これら	516	298	155
どの	509	1,100	284
そこ	446	298	232
それら	191	93	26
そうした	136	19	26
どちら	118	242	439
どこ	107	75	181
あの	86	19	77
その他	79	112	310
こんな	43	56	129
どんな	41	56	620
そんな	41	112	77
どういう	39	37	181
どれ	38	56	232
そういう	35	373	52
こちら	18	19	26
そういった	17	19	52
こういう	5	19	52

表7：論文に比べると使用に有意差のある指示語(網掛顯著)

	短<論と比>	留<論と比>	短<留と比>
この			
その	論文	論文	
それ	論文	論文	短大生
これ			
ここ	論文	論文	
これら	論文	論文	
どの	短大生		短大生
そこ			
それら		論文	
そうした			
どちら	短大生	留学生	
どこ			
あの			
その他		留学生	
こんな		留学生	
そんな	短大生		
どんな		留学生	留学生
どういう		留学生	
どれ		留学生	留学生
そういう	短大生		短大生
こちら			
そういった		留学生	
こういう		留学生	

<短(論と比)>は、論文と短大生の使用頻度に有意に差があるもの、<留(論と比)>は、論文と留学生の使用が顕著に有意に差があるもの、<留(短と比)>は、短大生と留学生の使用頻度に有意に差があるものを示す。それぞれ有意に多いものには多い方のテキスト名を書いている。表6と表7を比べて見ると、表6の頻度が高いか低いか特定できる。

論文と日本人学生に有意差($\alpha=0.5$)が見られた指示語は、「その」「それ」「ここ」「これら」「そういう」「どちら」「そんな」「どの」である。これを踏まえて表6を見ると、論文に比べて使用頻度が低いもの、逆に、論文に比べて使用頻度が高いものが確認できる。

短大生のレポートでよく使用される指示語には、対話場面で聞き手にとって既知であることを前提に使う「そういう」や、話し言葉とされる「そんな」「そういう」が含まれており、また、文脈指示の「そ」系の語も使用している

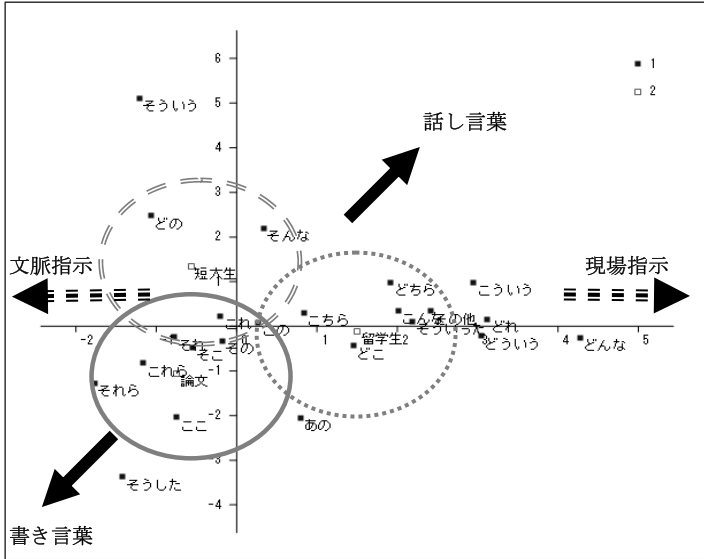


図 1：指示語の使用傾向

が、その頻度は論文に比べると低い。

各テキストの特徴的な語彙使用の傾向に焦点を当て、その分布を視覚的に鳥瞰するために、表 6 を利用してコレスポネンス分析を行った。図 1 は、語彙頻度を指標にそれぞれのテキストの傾向を視覚的に相対化するものである。図 1 を見ると、学術論文で顕著に使用される語句は左下に集まり、学生のレポートで顕著に使用される語句が論文と対比的に右上の方に別れる。

図 1 のそれぞれのフィールドに見られる語を拾っていくと、表 6 にて各テキストで顕著な使用が確認された語のうち、どの語がそのテキストの典型的な特徴として傾向の差を示すのかが確認できる。「それら」「そうした」「ここ」「これら」「それ」などが論文の特性を担う語句であり、「そういう」「そんな」「どの」などが短大生の文章中の指示語の特性を表す語句で、「こんな」「どちら」「どこ」「こちら」などが、留学生の特性を表す指示語句だということである。

これら 3 群に分かれた要因は、表 6 の結果からも推測されたもので、群別に

使用が顕著な指示語句の特性によるが、その特性とは、すなわち、文脈の流れを表す「書き言葉的」なものか、会話で利用されるような「話し言葉的」なものか、さらに、話し言葉における「文脈指示」用のものか、「現場指示」のものかの違いによる差だと考えられる。

以上、今回調査した学生の文章には、少なからず、対話場面での言葉遣いが見られたことから、この学生らは、文脈を指示することで論述を織りなすこと、すなわち、論述スタイルにおける指示語の正確な利用方法に対する理解が不完全だったと考えられる。

3.2. 接続詞

接続詞は、全体的にいずれのテキストでも使用数が少ない。まず、総語数中の「接続詞」の割合を調べてみると、今回のテキストにおいては、学生レポートでは0.7%の使用率で、学術論文は0.8%の使用率であった（留学生は0.6%）。数値の上でみると、大差なく見えるが、 χ^2 検定の結果では、日本人学生と論文では、学術論文での使用が有意に多かった。ちなみに、3つのテキストの中で取り立てて接続詞の使用率が高いのは留学生である。

次に、コレスポネンス分析を行ったところ、接続詞の使用量とバリエーションにおける差違が伺える。学生レポートでも、おおむね、文脈形成のために利用される接続詞が使用されていることが伺えるものの、短大生は「また」「そして」を学術論文よりも高頻度に利用していることから、これらの決まった接続詞を何度も繰り返し使うことが確認できる。ちなみに、留学生の接続詞の使用頻度と使用バリエーションが3種のテキストの中で取り立てて高く、学術論文を基準とすれば、留学生は、必要以上に、接続詞を利用するという過剰使用の傾向が伺える。

図2は、コレスポネンス分析の結果を散布図にて視覚化したものである。学術論文は、学生レポートとは異なり、前の話題を踏まえて次につなぐような論述展開を想定する接続詞を使用する傾向が見られる。短大生のレポートでも、「ところが」「そこで」「なお」といった前述の話題を踏まえて論を展開するものの使用が見られるが、多様性という点ではバリエーションに乏しい。ま

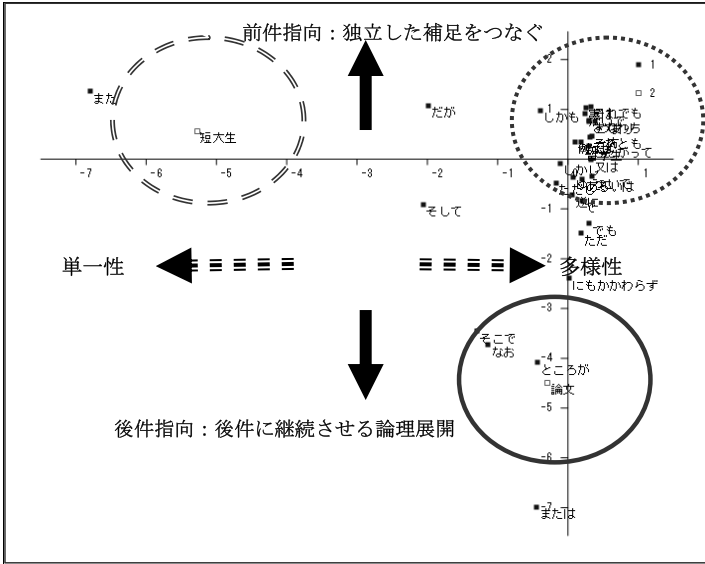


図 2：接続詞の使用傾向

た、表 8 から「また」「そして」など後述のものにつないでいくものの使用も認められたが、この 2 つの接続詞は、結局、単純に、前件の補足を追加するために、後続をつなぐようなものである。さらに、この 2 つの接続詞のみを多用しているという特徴を考えれば、日本人学生のレポートの接続詞の使用状況は、学术论文とは論述展開の上で異なっている。

では、学生が論文相当の論述展開を練習する上で、どのようなものを想定すれば良いだろうか。文系学术论文で多用される接続詞がいくつかわかったが、他にどのようなものがあるかを見るために、学术论文にのみ見られた接続詞を全て取り出してみた(表 9)。表 9 を見ると、学术论文では、< 1 > 漢字表記や送り仮名の使い方で標準表記外の書き方を意図的に使い分けている場合がある、< 2 > 「反面」など、名詞や副詞を「接続詞」として論述展開に利用している、< 3 > 古語や文語調の語彙が多めである、などの特徴が見られた。なお、説明文中の引用語句が語彙リストに加わっているために、古典語が混じっているが、考察の対象外であることを断っておく。

表 8：接続詞のコレスポネンス分析の結果 (CAnalysis)

	群	第 1 成分	第 2 成分
固有値		0.283025	0.034443
相関係数		0.532001	0.185588
寄与率		89%	11%
累積寄与率		89%	100%
留学生	2	-0.21191	-0.20868
短大生	2	5.27783	-0.56749
論文	2	0.293726	4.49386
	群	第 1 成分	第 2 成分
あるいは	1	-0.2082	0.413345
さて	1	-0.30017	-0.7738
しかし	1	0.115096	0.087539
しかも	1	0.39765	-0.97321
したがって	1	-0.30499	-0.27098
すなわち	1	-0.30745	-0.7619
そこで	1	1.297416	3.45528
そして	1	2.05777	0.908903
それでも	1	-0.32296	-1.05394
それとも	1	-0.31585	-0.44167
だが	1	1.986502	-1.07175
ただ	1	-0.1901	1.489239
ただし	1	0.167829	0.481826
ついで	1	-0.34302	0.350073
つまり	1	-0.38438	-0.75269
で	1	-0.19482	0.832176
でも	1	-0.30744	1.298551
ところが	1	0.428412	4.08972
なお	1	1.137195	3.73689
にもかかわらず	1	-0.02089	2.39118
また	1	6.79843	-1.36383
または	1	0.446215	6.98601
ゆえに	1	-0.07383	0.374923
一方	1	-0.34244	-0.467
逆に	1	-0.06461	0.725971
次いで	1	-0.24675	-0.91155
次に	1	-0.19296	-0.33583
実は	1	-0.25461	-1.03941
又は	1	-0.33215	0.013667
例えば	1	-0.09837	-0.35079

表9：今回、学術論文にのみ見られた接続詞－仮名漢字表記を別－

順位	素頻度	接続詞	順位	素頻度	接続詞	順位	素頻度	接続詞
1	69	しかしながら	21	4	乃至	41	1	ついては
2	67	かつ	22	3	じゃ	42	1	ですから
3	34	即ち	23	3	なら	43	1	どこから
4	24	だからこそ	24	3	ほな	44	1	ともすれば
5	20	とすれば	25	3	但	45	1	なのに
6	17	ないし	26	3	否	46	1	わけても
7	15	但し	27	3	併せて	47	1	若しくは
8	11	ともあれ	28	2	さりとて	48	1	本当は
9	8	或は	29	2	たとへば	49	1	例へば
10	7	それどころか	30	2	ないしは			
11	7	或いは	31	2	ましてや			
12	7	即	32	2	然し			
13	6	そのうえで	33	2	反面			
14	6	だとすれば	34	2	並びに			
15	6	と同時に	35	1	おまけに			
16	5	かくして	36	1	さもなければ			
17	5	さあ	37	1	されど			
18	5	そうなると	38	1	そりゃ			
19	4	それだけに	39	1	だけど			
20	4	だって	40	1	だとすると			

学術論文で使用されていた接続詞<1>～<3>は、通常の「一般的な」アカデミック・ライティングの指導項目には挙げられていないようなものである。中には、学生が、いわゆる「接続詞」として学習していないものが、「接続詞」として利用されるようなテクニクも見られる。文系学術論文の特徴かどうか、今回、検証していないが、これは、目標となる学術分野の習慣であると考えられることから、目標分野を明確にした指導の必要性、さらに、接続詞の利用方法そのものを、論述という観点からみて指導する必要性が指摘できる。

3.3. 文末形式

3種のテキストそれぞれの使用頻度に有意差の見られるものを確認した。ついで、コレスポネンダンス分析の結果を表10にまとめなおし、3種のテキストそれぞれの使用頻度に有意差の見られるものを確認した。

論文でもレポートでも、事実等を述べていく叙述的な文末形式を利用してはいるが、学生のレポートには、結果や判断を考察的に述べる表現や、ナレー

表 10：文末形式の3テキストの差（網掛顕著）[PMW]

基本的な文末形式			使用に極端な差が見られるもの			
文末 PMW	留学生	短大生	論文	短<論と比>	留<論と比>	短<留と比>
た。	10204	6246	2548	短大生	留学生	留学生
だ。	1524	1715	324	短大生	留学生	
だろう。	387	447	538			
である。	3410	4307	5225	論文	論文	短大生
ている。	2351	4326	2815	短大生		短大生
でした。	1369	19	2	論文	論文	
です。	1033	112	18	短大生	留学生	留学生
ない。	1137	1231	2287	論文	論文	
ました。	1137	261	12	短大生	留学生	留学生
ます。	1498	280	33	短大生	留学生	留学生
ません。	310	19	6		留学生	留学生

その他、論文、レポートの文末としてよく紹介されている文末形式

文末 PMW	留学生	短大生	論文	短<論と比>	留<論と比>	短<留と比>
ある。	827	1361	1068			短大生
いる。	258	317	128	短大生		
う。	1137	597	1102	論文		留学生
か。	1007	2014	737	短大生		短大生
させる。	0	19	30			
する。	697	1286	1136		論文	短大生
せる。	0	37	32			
たい。	155	354	438	論文	論文	
ておく。	0	19	74			
できる。	103	186	396			
てしまう。	52	168	68	短大生		
てみる。	0	37	41			
なる。	207	373	890	論文	論文	
られる。	491	820	739			
れる。	439	597	949	論文	論文	
わかる。	103	373	97	短大生		短大生
言う。	26	75	65			
言える。	0	93	111			
考える。	52	559	114	短大生		短大生
思う。	930	242	103	短大生	留学生	留学生
分かる。	207	56	44	短大生	論文	短大生

ションとして自身や読者の行動を説明するような表現、また、丁寧体の文末形式の利用が、有意に多く見られる。留学生は、日本人学生よりも、「思う」を多用しており、同様に、「分かる」といった判断を示す文末形式の使用も多い。留学生には、その上、丁寧体で書くという特徴があるが、表9で学術論文との間に有意差の見られる文末形式を見ると、短大生にも丁寧体の利用が見られることから、学生と、待遇的な表現を全く使わない学術論文とは、文末形式とい

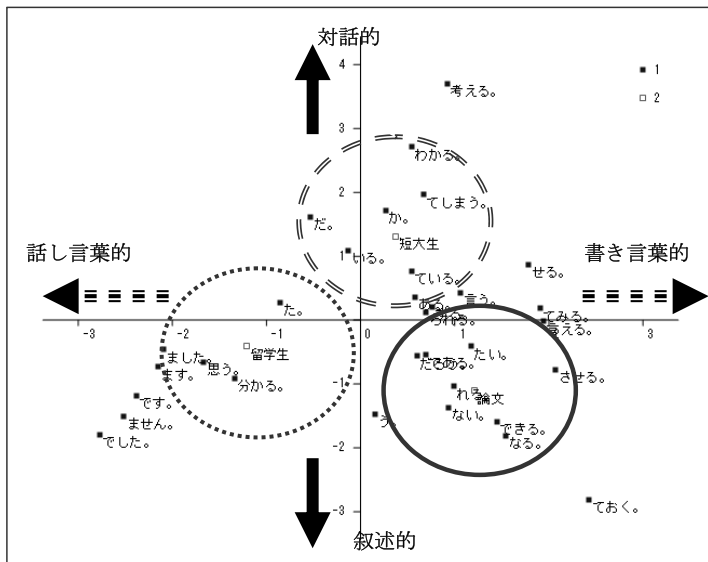


図 3：文末形式の使用傾向

う観点から見れば、際立って異なる。

表 10 に見られた 3 テキストの文末形式の特徴を、散布図（図 3）で相対化すると、同じ学生でも、短大生と留学生では問題が異なることが確かめられる。3 テキストの文末形式は、対話的か叙式的か、書き言葉的か話し言葉的かで対立している。丁寧体であることを除いて表現の方法のみに着目すれば、留学生と学术论文は、事実等を述べていく叙式的な文末形式を利用する傾向がある。軸を解釈すると、留学生も短大生も待遇関係を意識した表現を利用していることから、対話的、または、話し言葉の表現で記述しており、論文と留学生は、事実を叙述する記述が、短大生より顕著であることが、確認できる。

短大生の記述に多く見られる対話的な文末表現を利用した記述は、実は、小学校の「教科書」の文末（中尾 2001）と類似している。小学校の教科書では、どの教科でも、学習の展開や考察の指示を、「考える」「わかる」「ある」「～か」「てみる」「てしまう」「言える」等の表現で示すものが多い。国語科の教科書でも、本文の前後に必ず挿入されている学習展開のナレーションの表現

が、意識的か無意識かはわからないが、学生の記述に見られるということは、記述のお手本が教科書の記述スタイルであることも考えられる。

そうであれば、学生の知識として頭の中に存在している記述のお手本を、学術論文のスタイルに換えるような指導が必要だろう。レポートの記述練習の前に、典型的な学術論文のスタイルを読み解くステップを設けることが望ましいのではないか。

また、文系学術論文では、文末表現「～か。」が現れるか、「～になる。」「～う。」が現れるかで、国語学と国文学という近接分野の文体差が何えた（中尾2012）。文系学術論文らしさを高めているものとして、国語学、国文学の微妙な差にも現れるようなものが、特に、文体の差にも現れてくる可能性が考えられることから、文系の学生の論文らしさを向上させるには、文末形式の分野差を念頭においた指導にも配慮する方がよい。

学生のレポートと、論文とは、文章との位相に対する経験知が違った人が記述しているという点で異なっている。その経験値が、文体に影響すると考えられる。

3.4. 村田の接続語句

コレスポネンシ分析の結果を表11にまとめ、有意差にかかわらず、他のテキストより比較的多用している表現をあげる。

論文：「～に基づいて」「したがって」「すなわち」「ただし」「むしろ」「一方」「他方」「たとえば」「～において」「～としたら/とすれば（「～とすると」以外）

短大生：「～による類（理由・根拠・方法）」「～のため＜理由＞」

留学生：「～た（の）結果」「～のため＜目的＞」「～について」「～に対して」

「他方」が、論文のみで割に多く利用されている。他にも、「たとえば」が多く利用されている。短大生には「例えば」という漢字表記の形で多用されていたものが、論文では、平仮名表記で利用されているということである。

表 11：村田の接続語句の使用差 [PMW]

村田 2007 の接続語句	留学生	短大生	論文	留(論と比)	短(論と比)	短(留と比)
～ [た / の] 結果	1,007	261	179	留学生		留学生
～うえ [で]	77	298	152		短大生	短大生
～ [の] ため (目的)	1,472	653	442	留学生	短大生	留学生
～ [の] ため <理由>	362	727	218		短大生	短大生
～とする(れば と なら たら ても)	77	149	185			
～とともに	52	56	169			
～とは <定義>	155	1,268	1,419	論文		短大生
～ながら [も] (逆接)	155	149	164			
～において / における N	362	373	2,187	論文	論文	
～について / についての N	2,454	1,827	1,597	留学生	短大生	留学生
～にもかかわらず	26	0	45			
～にもとづいて	0	19	167	論文	論文	
～による類(理由・根拠・方法)	852	578	396	留学生		
～ [の] に対して	1,498	298	479	留学生		留学生
～ものの	103	93	134			
したがって	52	37	224	論文	論文	
すなわち	26	75	296	論文	論文	
ただし	52	37	190		論文	
たとえば	310	56	558		論文	留学生
つつ (同時)	77	93	145			
つつ (逆接)	52	93	29		短大生	
つまり	491	485	500			
ので <理由>	284	447	415	論文	短大生	
～まま	258	280	244			
むしろ	103	19	181		論文	
一方 [で]	310	149	274			
他方	0	0	50			

表 11 に基づく コレスポネンス分析の結果を図 4 で俯瞰し、3 種のテキストの特性として図に現れる語句を、複文の性質から見ると、おおよそ、次のように、前件と後件のどちらを指向するかという観点から分けられるのではないかと考え、分布傾向差を判断する。

前件指向的

「・・・による<原因・理由>～」 「・・・のための<理由>～」 「・・・
～のための<目的>～」 「・・・た|結果～」 「・・・についての～」

後件指向的

「～とは・・・」 「～ものの、・・・」 「・・・うえで～」 「～にもかかわら

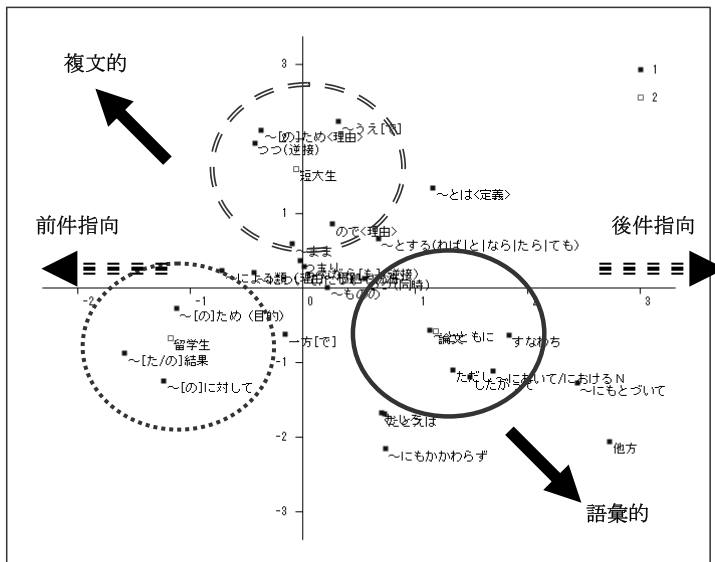


図4：接続表現（村田 2007）の使用傾向

ず・・・」「～にもとづいて・・・」「～とする（と／なら／したら／れば／して）・・・」「～における・・・」「したがって・・・」「すなわち・・・」「ただし・・・」「むしろ・・・」「他方・・・」「・・・つつ～」

この4つの傾向差で分けられると軸解釈すれば、短大生、留学生のレポートは、前件を指向する複文を作る接続語句を用いる傾向があり、学術論文は、語彙的なタイプの接続語句を用いてその語彙的な接続語句で後件を指向して後ろへ流れをつないでいくための語句を用いる。

図4での観察に基づき、表11に戻って、短大生の使用数が論文と比べて有意に低いものを見ると、「～とともに」「～にもとづいて」「したがって」「ただし」「むしろ」である。これらは、論点の立つ位置や、論述の立場を明示して文脈を作っていくことに用いられる表現であり、また、後件を指向する表現でもある。したがって、これらの表現の必要性が理解されていないか、十分活用できないということを考えれば、短大生は、論述による後続展開という文脈自

体が十分理解できていないこと、論述で、特に、結論を「まとめる」ことが苦手であると推察できる。また、「すなわち」という「言い換え」が利用されていないことから、類似表現に置き換えて文章を織り上げていく方法も十分理解していない可能性が考えられる。

4. 考察

今回、指示語、接続詞、文末形式、接続語句を手がかりに、学術論文と学生レポートの表現方法を比較した。ここでは、それぞれの指標を観点として見た場合の指導上の留意点をまとめる。

4.1. 指示語指導時の配慮

今回調査した学生の文章には、少なからず、対話場面で使用する指示語が用いられていたことから、この学生らは、指示語に、文脈を踏まえた利用方法と、現場の眼前描写で利用する方法とが異なるという文法上の理解が不完全だったと考えられる。この学生らは、ごく平均的な語彙力の短大生であったことからすると、今後の文系短大生の指導では、必要に応じて、指示語と文脈との関係を把握するような指導を行った方がよいだろう。

文脈指示は、テキスト内の要素のみで解釈が完結しなければならないため、「言語的文脈」が「義務的に」存在しなければ機能しない（庵 2007, p28-29）。このような文法的な理解が十分かどうか、理解の程度がどの程度かを、クイズ等で判断したうえで、論旨が明確な論文を読み、その論文の指示語をたどって流れをつかむような読解練習を行うことや、論述スタイルの文章中の指示語の使用方法を、具体例をあげて練習することが考えられる。指示語の指導には、指示語の文法的知識を増やしてから記述練習に入るといった読解と作文を連動させた指導を考えたい。

4.2. 接続詞

今回の調査対象の文系短大生は、種類は少ないが、「例えば」「ついで」とい

う後件につながものを利用している。しかし、同じものを多用すること、ならばに、この2つは、結局、単純に、前件の補足を追加するために、後続をつなぐようなものであることからすると、学生は、話題を後続に展開させていくことで論をつむいでいく「流れ」が文章にあること、それを接続詞で形成していくという接続詞の意義がよく理解できていなかったと考えられる。

今回の学術論文で多用されていた接続詞「または」「そこで」「なお」「ところが」「にもかかわらず」などを、論述展開を生む接続詞として、その利用方法を具体的に練習することもよいだろうが、この他に、接続詞の漢字表記の使い分けや、名詞の接続詞的用法、古語や文語調の語彙的な接続詞といった、文系学術論文によく見られる使用方法も知識として知っておくとよいだろう。

ただし、学生は、主題に対して、考察をすすめていくという構成で長文を書くことが、結局、苦手なのだと考えられることから、理解し、使用できる接続詞を増やす一方で、論理的な思考の流れを構成するという論理展開そのものを練習しておく必要がある。そのうえで、展開に利用できる接続詞を具体的に当てはめる練習を行うこと、また、論述展開を実際の文章から読み取る練習を併わせることで、接続詞の意義に対する理解が深まると考えられる。

4.3. 論述における文末の意味を教える

今回の短大生の文末は、待遇関係を意識した表現、すなわち、対話的、または、話し言葉で用いられる表現を比較的多く利用していた。また、その表現が、小学校の教科書で学習の展開や考察の指示を与えるのに利用される、「考える」「わかる」「ある」「～か」「てみる」「てしまう」「言える」等の表現であった。

このことから、叙述の流れを形成するために、それらは必ずしも必要でないことを紹介し、文章にはスタイルの違いが存在することを改めて意識させる必要がある。文章にも位相差があり、その文章の位相差がスタイルの違いに反映されていることを知らなければ、叙述で論理を紡いでいく方法の存在が認識しきれないことによる。そのうえで、学術論文のスタイルを紹介するために、典型的な学術論文のスタイルを読み解くステップを設けることが望ましいだろう。

今回の短大生の文章における文末形式には、待遇関係を意識した表現、すな

わち、対話的、または、話し言葉で用いられる表現が、比較的多く利用されていた。また、その表現が、小学校の教科書で学習の展開や考察の指示を与えるのに利用される、「考える」「わかる」「ある」「～か」「てみる」「てしまう」「言える」等の表現であった。

遠い昔にすり込まれた「展開の表現」と文末形式を関連づけているのだろうが、ここからも、文末形式と論述展開の関係のあり方を、他に、知らないと考えられる。文章にも位相差があり、その文章の位相差がスタイルの違いに反映されていることを知っていれば、文章にはスタイルが存在することが認識でき、その結果、流れを形成するために、叙述であっても、論述展開が可能であること、対話的な表現は必ずしも必要ではないことが理解できるはずだからである。

論述における文末の意味を教えるためには、「論述」形式と表現の関係が明示された教材が必要である。できれば、スタイル毎の典型例が読み取れる練習が組み込まれていることが望ましいが、今のところは見当たらず、独自の対応を考える必要があるだろう。

4.4. 接続表現について

学生のレポートでは、「～とともに」「～にもとづいて」「したがって」「ただし」「むしろ」の使用数が論文と比べて有意に低い。これらは、論点の立つ位置や、論述の立場を明示して文脈を作りはじめるのに用いられる表現であり、また、後件を指向する表現でもある。これらの表現の必要性が理解されていないか、十分活用できないということから、学生は、論述による後続展開という文脈自体が十分理解できてないと考えられる。また、論述で、特に、結論を「まとめる」ことが苦手であると推察できる。

学生のレポートは、結論部分がうやむやになっているものが多いが、この点からも、「論理性」や「文脈」に焦点を当てる配慮が必要であると考えられる。

4.5. 学生の弱点

学術論文と比較すると、学生の「論文らしさ」はある程度認められるもの

の、「不十分」であることが伺えた。それは、「論文らしい」表現や論述表現の使用に偏りがあること、学術論文には見られない表現を使用していること、文系学生の文系論文らしさを形成する語句を知らないことによる。少なくとも、以下のような語句を用いることができるだけでも、論述性が高まると考えられることから、以下の語句自体の意味を文脈や位相差と関係づけて把握することからはじめればよいのではないか。

接続表現：「～にもとづいて」「～とは」「～において」「ので、」

指示詞：「これ」「それ」

文末形式：「ですます」「た」→「である／ている／する／なる／ない」

指導時には、「論述」の形式と表現の関連性を明確に基準化して指導すること、ならびに、理系や文系、人文科学、国文学等、分野別の学術論文らしい語が、どのような文脈で利用されているのかといった知識を紹介することが必要だと考えられた。

今回の学生のレポートに表れた調査指標を見る限りでは、学生は事実を引用して、実証的に示しながら、何かを論じる力が弱いと考えられた。学生にアカデミックな場面に対応できる力を向上させるためには、表記規則だけでなく、「事実に基づいた考察という実証」を考える練習を、表現上も内容上も、行なうのがよい。「論文らしさ」向上のポイントは「論述」目的に特化した書き方にあるとして、「論述」のための特別な語句の用法に関する知識、「論述」表現には特別な知識が必要だという意識を形成するのである。

文章の位相差に配慮した教材を用意し、論述という観点から、今回の調査指標を意識させるような読解と記述練習を計画するのが望ましいが、そのためには、できれば、「アカデミック・ライティングの指導」では、具体的に、目標とする分野を特定し、その分野に特化した論理展開の表現方法を学ぶことが効率的である。多角的な対応を目指す一般的なアカデミック・ライティングの教材を利用する際は、指導上の目標設定を別途設けて、そのための指導を補填する必要があるだろう。

5. 今後の課題

今回は、国文学系論文と学生の期末レポートとを比較して、それぞれで利用される指標の特徴から、両テキストの一致具合や差を判断したが、大妻短国の学生の卒業論文を念頭におくのならば、その分野の一つである日本史系の論文や日本文化系の論文との比較、さらに、俳句や小説の創作という観点からの比較等も行う必要がある。

また、「文章表現」科目の期末レポートに基づいた比較ではなく、実際の学生の卒業論文や創作との比較も行い、2年間の学びの程度を把握する必要もあるだろう。

なお、今回、学生のレポートのサンプル数が少なかったため、この結果は、H22、H23年度の短大生の達成度である。もちろん、この何年かは同レベルの学生に、同様の指導を行っていることから、おおよその平均として、指導の方向性や留意点を考えたが、さらに複数の年度にわたって、学生のレポートの数を増やし平均的な部分を見ていく必要がある。今後の課題である。

参考文献

- 石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠編（2010）『言語研究のための統計入門』くろしお出版。
- 中尾桂子（2001）「年少者中級日本語教育における読解スキル指導のための小学校教科書の文章構成の解析」神戸大学国際文化学会『国際文化学』第4号，pp.133-151。
- 中尾桂子（2010）「教師に意識される学生の文章表現上の問題と学生作文の性質について」統計数理研究所『統計数理研究所共同研究レポート 238 『言語コーパス分析における数理データの統計的処理手法の検討』，pp35-47。
- 中尾桂子（2012）「国語・国文学論文におけるアカデミック性判断の指標」大妻女子大学国文学会『大妻国文』第43号，pp1-25。
- 村田年（2007）「専門日本語教育における論述指導のための接続語句・助詞相当語句の研究」統計数理研究所特集第66巻第2号，pp.269-284。
- メイナード，泉子・K（2004）『談話言語学：日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究』くろしお出版。
- CiNii:<<http://ci.nii.ac.jp/>>

KH Coder : <http://khc.sourceforge.net/>

College Analysis: <http://heisei-u.ac.jp/ba/fukui/analysis.html>